

Fate/wunder night

カフェインましまし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Fateとネギまの二次創作です

ネギまの世界にアーチャーこと衛宮士郎が召喚された物語です

Fate×ネギまのSS読んで自分がみたい話がなかなかつたんでなら書く
かつてなりましたw

目 次

序章	運命の夜	
プロローグ		1
1 時限目	正義の味方の末路	—
2 時限目	落下、そして出会い	6
3 時限目	出会いからの尋問?	1
4 時限目	今後の遭遇	—
第1章	担任は子供先生と正義の味方	
5 時限目	子供先生来日	—
6 時限目	子供先生と正義の味方	69
32		47
23		
89		

序章　運命の夜 プロローグ

——女の話をしよう。

時は中世ヨーロッパ。まだ暗黒時代と呼ばれていたヨーロッパのある国 の 地方貴族の城に少女がいた。

少女は黄金の髪を靡かせて肌は透き通るような綺麗な白い雪の様な美しさをみせていた。

貴族の父と母、そして城の従者とメイド。何一つ不自由なく、両親に愛されてすくすくと育つていった。

——しかし、その幸せは突如消え去ってしまった。

少女が10歳の誕生日。本来なら多くの人に祝つてもらい幸せの絶頂を感じ取れる

日なのだが、少女は幸せの代わりに――。

地獄を垣間見た――。

満月の夜、少女は目を覚ますと周りは暗く不気味なほど静まり返っていた。ふと自分の足元を見てみるとそこには。

――首から血を流している両親の姿があつた。

少女は何がどうなっているかわからなく、ただその場で立ち尽くしていた。ふと自分の両手を見てみると手には血が付いていた。

それだけじやない、口元には何かが垂れている感触を知った。

口の中には鉄の味がした、それも何故か美味しいと感じてしまっていたのだ。すぐさま少女は頭の中で理解してしまった。

自分が両親を殺めてしまつたと――。

そして両親の倒れた場所から奥の方から人影がみえた。

その姿は黒いローブの様なもので身体全体を包んでおり禍々しい何かが肌に感じ取れていた。

そのローブを纏つた者は少女に近づきこう言つた。

『ほう、流石は腐つても我が娘。実験は成功の様だな』

そのローブの人物は自分の娘と言いしかも実験は成功と呟いたのだ。

そう、少女は人体実験のモルモットとされ、不死の化物、”吸血鬼の真祖”へと変えられてしまつたのだ。

そして少女は住み慣れた城と両親を跡目に旅立つた。それは過酷で、苦痛で、常人に耐え難い茨の道となる。だが少女は心に決めた。

必ず自分を化物にした者への復讐を胸に刻みその道を歩み始めた。

——とまあ、本来ならばこれが少女の人生で過酷な旅路であつたのだが。

それは神様の悪戯か、果ては有り得ない奇跡か、どちらにせよ少女はある出会いをした。

絶望へと落ちてしまふ瞬間に本来ならば有り得ない事が、少女にひと柱の光を与えた。

まるで子供の絵本の世界の話で、捕らえられた姫君を救い出すかのような英雄のような御伽話のような出来事だつた。

場所は先程の少女が目覚めた場所。ロープを纏つた者が少女に向かつて話しかけようとした瞬間、少女の目の前で魔法陣の様なモノが突如現れて眩しい光を放つたかと思えば次の瞬間爆風が起き辺りを砂埃が舞う様にそれは現れた。

——それは白く染まつた髪をして肌は浅黒い褐色、目は鎧びたオレンジ色をしていた。

——身体には黒いボディアーマーを着け、赤い外套のマントを羽織つていて。

——身長はゆうに180cmをも超える大きな体格。

そしてその人物は目の前の少女を見ると少し立ち止まり、こう言つた。

「サー・ヴァント、アーチャー。召喚に応じ参上した。

——問おう。君が私のマスターかね？」

——その日、少女は運命に出会う。

1時限目 正義の味方の末路

暗くジメジメして周りを石垣が積まれた部屋。

相当年期が入っているらしく、密閉されていて灯りは天井付近の壁にレンガひとつ分のスペースしか空いてない外の光があるくらいでそれ以外の灯りらしいものは見当たらない。

そんな部屋の中に鎖を両手大の字に壁に繋がれてぐつたりとしている1人の人間がいた。

——名は”衛宮士郎”と言う男だ。

見た目から年齢は30代前半で髪は長く手入れしてないのかボサボサで伸びっぱなしのようで身体はあちらこちら傷や暴行が加えられている描写が確認できる。

さもこんなところに入れられているとなると凶悪な犯罪を犯したのかと思うが、実の所そうであつてそうでなかつたりする。

寧ろその男は戦争や紛争なので弱き立場の人々を救いつづけていた。

そんな話を聞くと何故こんな仕打ちを受けているともうだろう。

彼は救い続けた。だが彼はその代わりの見返りを一切求めなかつたのだ。

一見そんなことがなんだとと思うだろう。だが救われた人々はこれだけ命をかけて救つてくれたのに何にも求めてこないのは理解できなかつたのだ。

そしてそれは次第に不安と恐怖を膨張させていったのだ。

そしてついに、その男は救つた人々から事もあろうに嘘の罪状を突きつけられて死刑勧告、投獄されてしまつたのだ。

——人々は思つた。

”命の恩人を濡れ衣を着せて悪人にしてしまつた”

”怒つて全員殺してしまつう”

だが人々の考えとは全く違う答えが出てきた。

”——そうか、なら仕方ないな。”

予想外の事が男の口からでて、人々はますます恐怖した。

”あれは人間じやない、化け物”だと。

そして現在男は死刑執行までその部屋で時を待つてゐる。

「…あ、ああ」

男は後悔なんてしていない。

自分がやつてきた事は救われない人を救つてきた。

たとえそれがこの様な結末だととしても受け入れる覚悟はある。

——けど、ふと頭の中である事がよこぎつた。

『——士郎、どうしてもいくの?』

それは覚悟して一人で旅立とうとして、親友にして師匠であり恋人だった女性の事が
脳内に浮かんできたのだ。

「あ……とお、さか……」

今頃になつて心残りが出てきてしまつた。

けどもうそんなのは無意味だ。

今更遅い、もう俺は——。

(遠坂、悪い…達者でな…)

そう心の中で懺悔した。

ギイイ…

何か音が聞こえた。

その音が聞こえる方向に顔をむけると扉が開いていて、目の前にはぼんやりと人の姿があつた。

だが長い間この部屋にいたせいか目がぼやけていて姿形がわからなくなっていた。

「そう、か…もう時、間か…」

この部屋の扉が開くと言う事は即ち自分の刑の執行が今日行われるという事だ。たが”衛宮士郎”は今日をもつて死ぬが”エミヤ”はこれからも正義の味方として生きていける。

そう思えばどうと言ふ事はない。

死してなお俺は誰かを、弱き人を救えるなら——。

「久しぶりね、衛宮くん」

——衛宮士郎は驚いた。

それは自分が処刑を免れたことではなく。

そこにいるはずがない人物がそこにいたのだ。

忘れもしない、あのまっすぐで自分には眩しすぎる、かつて愛していた女性を。

◊♦?◊

「なん、で……ここに……」

「呆れた、最初の第一声がそれ？相変わらずね衛宮くん」

そういうつて遠坂は両手が縛られている鎖を魔術で強化した手刀で切った。

久々に重しがなくなつた両手は動かすのが出来なくてぶら下がつてゐる感じだつた。

「ちょっとまつてね、今衛宮くんの魔力を回復してあげるから。話はその後、いいね?」

コクンと頷くと俺の上半身を脱がすと片手を胸の方に当て”A n f a n g^{セツ}”と呟くと遠坂の手から魔力が流れ込んでくるのが直に感じ取れる。

ある程度魔力を貰うと視界が良くなってきて片言だった声も喋れる程度まで回復した。

「よし、さてなんで私がここにいるって話よね。それはもちろん身の程知らずの正義バカを助けるにきまってるわよ」

「いや、そもそもどうだが俺が聞きたいのは、なんでこここの場所がわかつたってことだ」

そうここは人間を隠し投獄するのにはもつてこいの場所で高精度な隠匿の魔術が張られていくら遠坂でもここを見つけるのは難しい場所だ。

「それについては私が説明しよう」

そう言つて会話を挟んできたのは1人の初老の爺さんだ。
どこかで見たような姿をしていたがなかなか思い出せない。

「この世界では初めて会うな衛宮士郎。私はキシュア・ゼルレツチ・シュバインオーグ
だ

「なっ!?

この爺さん今なんて言つた? キシュア・ゼルレツチ・シュバインオーグ
坂の御先祖の師匠だつた人で俺が投影した宝石剣を作つた人じやないか。

どうしてそんな人がここに?

「さて時間がないのでな、单刀直入で言おう。衛宮士郎お前はこれから死んでもらう
「なっ! 師範! それは! 私はそんな話は聞いておりません!」

「さて話は終わつておらん。正確にはこの世界では死んでもらうと言つことだ」
「えつと…どうゆうことですか?」

正直今いきなりすぎて困惑している。この世界では死ぬ? なんでそんな周りくどい

言い方をするんだこの人は。

「お」とばですが師範、私は衛宮士郎を助けるために同行いたしました！それを殺すとは！」

「だから死んでもらうとは言つたが殺すとは一言もいつておらぬが？」

「あの…俺もよくわからないのですが」

「そうだな、お前達にわかりやすく話すと衛宮士郎をこの世界から別の世界へと移つてもらう。そのためにこの世界の衛宮士郎は死ななくてはいけないのだよ」

「「はい？」」

2人して声を揃えて言つた。つまり俺がこの世界から別の世界に行くつてことか？

「あの、なんで俺が別の世界にいくつてなつてるんですか？」

「それはある人物からの依頼でな。私としてはどうでもよかつたのだがある条件を言われてな。興味が少しばかり湧いた為受けることにしたのだ」

「その、ある人物とは…」

「悪いがそれは言えん。内容は言わないでくれと言わされたのでな」

「誰だそんなことを頼んだのは：遠坂はある素振りじや知らなかつたみたいだし、桜はもう魔術の世界とはきつぱり縁を切つたから無理だ。：イリヤ？ けどもうイリヤは…。」

「話を進めるぞ、その人物から衛宮士郎をある別世界に送つてくれと言われたのだ私の魔法でな」

魔法。

そう魔術ではなくて魔法と言つたのだこの爺さんは。

キシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグ。その名を聞いて知らない魔術師はいない、魔術師が目指す根源。その根源にたどり着いたのがこのゼルレッチだ。そして魔術協会が定めた魔法の1つ、第2魔法”並行世界の運営”詳しくは知らないがなんでもあらゆる可能性がある並行世界へ行き来できるとんでもない魔法だと遠坂から聞いた事がある。

「だが実際に並行世界や別世界にいけるのは使い手の私のみだ」「ならなんで」

「だが、1人分の魂なら送れることもない」

——ああ……なるほど。

だからここで死んでくれと言ったのか、このゼルレッチ。話の内容そっちのけで結果だけ言うからわからなかつたぞ。

「勿論これはもう決まったことだ。お前に拒否権などはない」

おまけに傲慢ときた。

いつぞやの金ピカを思い出す様な勝手だな。
けど少し疑問がある。

「わかりました。けど1つ確認が」

「なにかね」

「自分は……力を手に入れる為……せ「世界と契約をしたことか?」……つ」

そんな事か?と言わんばかりの素振りでこの魔法使いの爺さんはすっぱりと答えた。

そうか…これが”並行世界の運営”の力か…。

「つ!!衛宮くんまさか…!!」

「そうだ、この男は世界と契約して死後の自分を売り渡したのだ」

「つ!!」

パン!!

と渴いた音が部屋に響くと同時に俺の左頬が叩かれた痛みが伝わってきた。
そして遠坂は俺を涙が出てきそうな顔で睨むとそのまま抱きついてきた。

「バカ!!…なんで…なんで衛宮くんまで…!!」

「……めん遠坂」

——ああ俺はまた大切な人を泣かせてしまった。

もう誰も悲しませないと誓ったはずなのに、また泣かせてしまった。
心はもう壊れていたはずなのに、胸の奥が軋む痛さを感じた——。

◊♦?◊

「さて、もう時間だ。これより衛宮士郎の魂を別世界へと移動させる」

「…はい、わかりました師範」

ゼルレツチが声をかけると遠坂は涙を拭き取りいつもの遠坂凜の顔に戻つて返事をした。

これから俺はこの世界からさよならをするみたいだな。

「衛宮士郎、お前は世界の契約で死後アラヤの元へ行くのではないかと思つていたのだな？」

「はい、なので魂を別世界に送ると言う事は俺は一度この世界で死ぬことになるのではないでしようか？」

「それには及ばん、正確にはお前の魂を肉体から切り離し第2魔法の力で別世界へと送りそこで受肉すれば問題ない」

なんとデタラメな、チート並の力を持つ魔法恐るべし。
でもその話を聞くと俺の新しい身体はまるで別の人間の身体をつかうことになるのか？

「あの俺の新しい身体は」

「そうさな、もしかしたら赤子からということになるのかもしれんな」

まじか、赤ん坊からとなると自我がある分長い時間を感じてしまう。まあそれは仕方ない、遠坂曰くそれは”心の贅肉”だ。

「ははは……はい、わかりました」

「では儀式を執り行う」

そう言うとゼルレツチは懐からある物を取り出した。俺はその物をよく知ってる。一度見たものは決して忘れたりするものか。

——宝石剣ゼルレツチ。

ゼルレツチが作成した限定的だか第2魔法を行使するところができる強力な魔術礼装。使用すればあらゆる並行世界から魔力を集めて使うことができると言う。

その剣を俺の前に持ってきて首元に近づけてきた。

剣からは異常なほどの魔力が渦巻いており自分が聖杯戦争の時に投影したものとは桁違いの迫力を感じた。

——今からこの剣に斬られてこの世界の衛宮士郎は一度死ぬのだ。

「師範、お願ひがあります」

「なんだ遠坂、これ以上はもう時間の」

「弟子の不始末をつけさせて下さい」

「…ほお」

た。

遠坂がゼルレツチに待つたをかけたかと思えば弟子の不始末をつけさせてと懇願し

ああそりいえば俺はまだ遠坂の元で弟子入りをしていたんだつけな。
俺はてつきりあの日出て行つた時に破門されたのかと思つていた。

「いいだろう、お前の師範としての責任ここで果たしてみせよ」
「はっ！ありがとうございます」

そう言うとゼルレッチは遠坂に宝石剣を渡すと、遠坂はお辞儀をしてゆっくりと俺の方に向かってきて目の前に立つた。

「てっきりもう破門されていたかと思っていたよ」

「ええ、でも貴方に直接は伝えていなかつたわ」

「そうか、そうだよなあの時はすぐに出で行つてしまつたからな……」
「……我が弟子、衛宮士郎。今日をもつて貴方を私との師弟関係を切り、ここに破門を言
い渡します」

「……はい、わかりました」

「そして、師範として貴方に最後の宿題を与えます」

「……え？」

「いい？衛宮くん。貴方はもうこの世界では数えきれない多くの人々を助けて、救つて、
幸せにしてきました。だから――――」

”——今度は貴方が助けられ、救われて、幸せになりなさい”

——その言葉を聞いて俺は涙をこぼしていた。

まいつたな、最後の最後での宿題がとても優しくて難しいモノになるとは。

「わかった。その宿題必ず達成してみせるよ」

「ええ。それじゃあ、さようなら——士郎」

「ああ、さようなら。凛——」

ザシユツ

こうして、この世界で多くの人々を救ってきた正義の味方衛宮士郎はこの世を去った。



「―――つて感じで別世界に送られたのはいいのだが…!!」

ヒュウウウウウウウウウ

「なんで現在進行形で俺は上空から真っ逆さまに落つこつたてるんだよおおおおお!!!」

ヒュウウウウウウウウウ

「どおおおおおおさあかああああああああああ
!!!!!!」

2時限目 落下、そして出会い

私、衛宮士郎は唐突ですが絶賛絶体絶命のピンチになつています。——その訳は。

ヒュウウウウウウウウウウウウウウ

いきなりスカイダイビング（パラシユート無し）状態だからです（白目）

「うわあああああああ?! いきなり目が覚めたと思ったらなんでさあああ!!」

あの時遠坂に最後の別れをすませ俺は目の前が暗転して全身の感覚が途切れたよう
に感じた。

まるで暗く、深い水の中に吸い込まれていく感じになつていて次第に意識が朦朧とし
てくると背中のあたりから神経の感覚を感じ取り、目を開けてみると——
辺り一面、透き通る暗い空、その空から無数に輝く星々、そして飛んでいる感覚——
—否、それは正しくは落ちているのであつた。

(くつ……このままだとこのスピードで地面に衝突するのはいくら魔術で強化された人間でも無事じやすまない……こは……)

同調、開始
トレイス・オン

そう心の中で、言い慣れた言葉と共に自分の身体全体の魔術回路を開き、接続する。

身体の魔術回路——メインの27本、内20本起動可

使用可能魔術——主に使用する投影、強化、問題なく使用可
認識不可による使用不可。ただしある魔術の性質上、部分的に限定だが常時

??????発動中
??????——使用不可、条件○○○○○○によって発動可

最後の2つはよくわからないが魔術回路は投影と強化が使える分には問題ないこと
がわかつた。

ならこの状況で取るべき解決策は——

ト
レ
ー
ス
・
オ
ン

投影、開始

言い慣れた言葉を唱え投影する物をイメージして出現させる
左手には使い慣れたカーボン製の黒い洋弓、右手には
無名の剣を投影させ矛先を真下に向けるため体勢を変え、矢を放つ。

(……よしーーこだ!!)

放つた矢^剣が一定の距離に入つたところで詠唱する。

ブローカン・ファンタズム
——壊^剣れた幻想!!

そう唱えると放つた矢は瞬時に爆発し、円球の爆風を作り出した。
するとその爆風は衛宮士郎を落下の重力を一時的だが落下スピードを弱めることになつた。

(よし、あとは落下の体勢を変えて……つて、なに……?)

投影した矢を真下に放つて爆発させ落下スピードを弱めたまではよかつた。だが衛宮士郎は1つ見落としていた事があつた。

——それは。

(くつ…俺としたことが!自身の身体が思うように動けない…だと!?)

その原因は自分が完全に新しい肉体に馴染めてなかつた。

そう見落としていたのは身体が思うように動けない為に着地する時の受け身の体勢が取れなかつたことだ。

(これでは地面に落ちると変わりない!…ちつ!…ならば!!)

瞬時に頭の中をフル回転させこの状況で取るべき最善の策を練り、一つの方法を思いつき行動に移した。

(うつ…間に合え!)

先程投影した矢をもう一度投影し、矛先を自分の真横に向けて放ち、そして放つた瞬間もう一度爆破させた。

「ぐあっ!?」

先程とは違い至近距離での爆破の為衝撃が直に食いその勢いで横に吹っ飛ばされる。

そう、咄嗟に取つた緊急回避は自分の落下する場所を地面から数メートルぐらい離れている森に移動する為に行つた。

森であれば無傷とはいかないが地面による激突よりは多少マシであると判断したのだ。

「がはっ!!」

だがそれでも至近距離での爆風により猛スピードで放り出されたようなものなので木々にぶつがりながら身体が強打されていく。

ドンッ!!

ようやく太い木にぶつかり止まれた。
しかし度々重なる強打によつて衛宮士郎はその木の根元に落ちてその場で倒れてしまい気を失つてしまつた。

(な……なんで……さ……)

意識が朦朧としている中、言い慣れた言葉を放つて衛宮士郎はグツタリと倒れたのであつた。

◊♦?◊

深い深い森林が立ち並ぶ森の中にポツンと建つてゐるログハウスがあつた。
灯りはついており中には1人の少女がベットの中で眠つていた。

「……ん」パチ

そして少女は何かに起こされたような感覚をあじわい不機嫌なような顔を出して目を覚ました。

「ふあああ：なんだ、この時間帯に来る奴は…」

この熟睡している所無理矢理起こされた少女。彼女の名はエヴァンジエリン・A・

K・マクダウエル。
ダーカ・エヴァンジエル

闇の福音の二つ名で知られている不死の魔法使いにして吸血鬼である。

「ちつ…ただでさえ力が封印されガキ共と一緒に学校なんぞ通わされているのにも関わらず、何故私がこの学園のネズミ退治などせねばならぬのだ…!!」

そうブツブツと文句を垂らしながらも黒いローブをまとい、反応があつた方向へと向かい扉を開けた。

首には古い銀のネックレスがかかつており月の明かりで眩い輝きを帶びていた。

◊♦?◊

「……ツ！アツ・カア…！」

うつ…背中と首筋を強く打つたせいか、だがそのおかげか気を失つてもすぐに目を覚ましたようだ。

くそ…身体がうまく動けないのは判断ミスだったが幸いにも大怪我などはしていないようだ。

「幸先がこれだと…思いやられるな…」

そう言いつつも頭では次の事を考えて行動しようとする。

(…ん？なんだ前方から何かしらの気配を感じ…いや違うそんなもんじやない、明らかにこちらに向かってくる!?)

そう考へてゐるうちにその向かってくるものは自分の目の前に現れた。

奇しくもその時の自分は目の前に現れた者に目を奪われた。

鮮やかな金色の長髪、真夜中だというのに真紅なほど不気味で魅惑のある眼、そして
齢10歳ほどの華奢な少女――。

咄嗟に自分は口から思わず言葉を洩らしてしまつた。

「は、はろー？」

いやはや、我ながら何を言つてるんだろう。

3時限目 出会つてからの尋問?

森林の静けさが不気味と一般人が感じる午前2時過ぎ。本来ならこのような場所に人はいないのが当たり前なのだが、その森の中で1人の少女が歩いていた。

「ふああ…ダメだ…眠すぎる…」

少女の名はエヴァンジエリン。

10歳の少女にしか見えないが、その正体は人の身ではない人外、真祖の吸血鬼である。

本来ならば吸血鬼にとつて夜中は活発になる時間帯なのだが、彼女の場合とある”呪い”のせいで吸血鬼としての力が弱まってしまい殆ど人間と変わらない身体になってしまっている。

たがそれでも今宵は満月、吸血鬼としての力が少しだが戻っていた。

「くそ…私は闇の福音^{ダーク・エヴァンジエル}として恐れられている吸血鬼だぞ…それがこんな…つち、全て

「アイツのせいだ」

そうブツブツと文句を垂らしながら歩いていると北東辺りから不自然な爆発音が響いた。

その爆発はかなり遠いが、その衝撃は凄まじくこちらまで届くほど強烈だった。

「…ッ!?なんだ今の爆発は⁈いやこれは」

エヴァは驚愕した。本来ならただの爆発ならばそれほど驚きはしなかつたがそれとは別に強大な魔力を感じ取れたのだ。

学園の結界は使い魔程度の物はスラリと抜けてこれるが普通の魔法使いや魔物ならばそうやすやすと抜けるはずはない。
だがその魔力は学園内から突如感じとれたのだ。

(これ程の魔力…^{あつち}関西のモノでもなさそうだ…だとしたら^{あちら}裏世界の奴らか…?この私を狙つて…まさかな)

だがそうではないと言う保証もない。

もし仮にそうなならば、今の自分には対抗できる術がないのが事実だ。

(ま、 そうなつた場合あのジジイ共に押し付けても問題なかろう)

この学園には教師共や学園長^{ジジイ}、そしてタカミチがいるのだ。あの人間達なら裏世界の魔法使いでも対処はできる。もしビンゴだつたら即座に退去できるよう魔力を準備して逃げれば、あとはエヴァの出番はなくて良いという事になる。

「さて、 そうすれば運の悪いネズミの顔でも拝んでみるか」

そう言つて服の中から学園長^{ジジイ}に渡された通信の魔道具でメッセージを送り、感知した方向へ向かつてエヴァは移動する。

「数分後」

結論から言うと例の侵入者は直ぐに見つかった。

何故ならばあの場所から移動した直後にまた爆発音が鳴り響きものすごい勢いで自分の目の前を謎の物体が顔にかすりそうなくらいの距離で真横を突つ切つていったのだ。

あとを追いかけていくと森林の中ではそこそこでかい木の根本にぐつたりと寄り掛かっている人物を遠目で見つけた。

「ふん、人間か。魔族ではなかつたみたいだな」

安堵と少しがつかりとした感情を抱きながら横たわっている人間に近づいていく。

夜なので暗くまた灯りもないでの姿がよく見えなくてさらに近づこうと体を前に出すとちようど月明かりがさして姿が明らかになる。
その瞬間エヴァの足が止まつた。

「なつ…そん、な…」

(バカな、ありえない――)

髪は赤毛で肌も白い、顔も成人していない幼さが残つてゐる顔つきだ。だが、あまり

にも似ていた。いや似ているなどのものじやない、これは——

「……は」

(つ!? こいつ起きていたのか!)

「はろー?」

「……は?」

—士郎 side —

目の前にいる少女に声をかけてみようと挨拶をしたら、まあなんともいえない気の抜けた返事が返ってきた。

うーん発音が間違っていたのだろうか。しかし俺は昔から英語の発音は苦手でよく藤ねえにも「士郎は英語はダメダメねーw」とは言われたが……なんか思い出したらライツときたぞ。

あ、もしかしたら国柄が違ったのかもしれない。それなら

「ボ、ボンジュール?」

「……」

「これまた反応なし。

だがこれしきのことで諦めたりはしない！

思い出せ、イメージするのは常に最強のコミュ力のある自分…よし!!

「チャ 「何か勘違いしているのかわからんが私は日本語でも分かるぞ」」

……あーーそうか、そうですか…何がイメージするのは常に最強のコミュ力がある自分だよ…今となつて急に過去の自分を殴りたくなってきた。

…ん？日本語が通じるだと？

「すまない、日本語が通じると言つたが。ここはもしかして日本なのか？」

「ああここは日本の麻帆良学園その郊外にある森の中だ」

麻帆良学園？日本にそのような場所があつたなんて聞いたことないな。いや別世界に行くとは言われたが…：

「日本のどこ辺りかわかるか?」

「どこ辺りだと? 貴様日本人なのに麻帆良学園^こがわからないのか?」

「ああすまない、なかなか聞かない名前だつたんでね」

「……」

うつ……やばいな警戒されているようだ。そんなに有名な場所だつたのか。

「それよりも、ここは関係者以外立ち入り禁止の区域だ。そこに夜中侵入している所でも怪しいが、先程爆発が起きて来てみれば貴様がこんな所で座つているときた」

「……」

「貴様、何者だ? なぜこんなところにいる?」

少女はこちらの痛いところを突くとまるで氷のような鋭さを放つ目でこちらを睨んでくる。

まずい、非常にまずい状況だと改めて認識した。

どう言い分を考えていたら遠くの方から大人數の気配を感じ取れた。

「ちつ…タイミングの悪い奴らだ。おい貴様さつさと立て移動するぞ」「えっ…なんでまた急に」「いいから黙つてついてこい！」

そう言うと少女は俺の腕を引っ張ろうと力を入れるが重くて持ち上げられないようだ。

当たり前だ10歳も満たない少女が大のの大人を立たせることなんて普通はできないからな。

「あー！もう！なんでよりによつて満月じやない時にこんな目にあうんだ!!」

「あの少しいいか？」

「なんだ!?」

「なんで俺を連れていこうとするんだ？」

「なんでつて、そりや貴様が怪しいから尋も…ん、ん。事情聴取しようと」

おい待て、今さらつと恐ろしいこと言つてなかつたか？

「事情聴取なら別に今でもできるんじゃないのか?」

「ほう、なら今この状況を来る奴らが見たらどーなると思う?」

「そりや…」

と答えようと思つたが今一度今の状況を改めて確認してみた。

時刻は大体夜中。

場所は薄暗い森の中。

明らかに不審者な自分と10歳くらいの少女。

……うん。どつからどう見てもヤバい光景だ、へたすりや問答無用で御用だ。

「理解したか?ならさっさと移動するぞ」

「移動するつていつたつてどこに?」

「この近くに私の住んでる寝床がある、一先ずはそこにある」

それはそれでもつとヤバくないか?

「いいから黙つてついてこい」

「つ……あーもうわかったよ。で、どこにあるんだその寝床つてやつは」

「よし、ここから南西の方角にある小さなログハウスが私の寝床だ」

「よしわかつた」

南西の方角だな。そろそろ気配が近くなつてきて見つかるのも早いと見た。
身体は強打は打つても先程とは違い全身に魔力が行き渡つていて問題なく動ける。

そうと決まれば…

「ではいくぞ」ヒヨイツ

少女が何か言いかけたが急ぐため抱き上げた。いまの状態はさながらお姫様抱っこで抱き上げている。

「なつ貴様！何をしている!?」

「急いでるんだろ？ならこっちの方が速い」

「ふざけるな！こんな格好…きやつ!?」

(強化、反映)
トレイス・オン

言い訳は後で聞くとして走る為、心の中で脚に強化の魔術を唱え猛スピードで走り抜ける。

走り始めた数十秒後俺たちがいた場所に10数名いる気配を感じ取れた。だがこのスピードでは追いつくのは無理だろうな。

「しつかり掴まつてろよ」

「な、な、な?!」

「あと舌噛むぞ」

～数分後～

さつきいた場所から数キロ離れた所に小さなログハウスが見えて来た。あれが抱えている少女が言っていた場所か。家の外装は綺麗でまだ建てて数年しかたつてないと見た。

「おい…降ろせもういいだろ」

「ん、ああすまない」

抱えている少女がぼそぼそと呟いているのに気づきすぐさまゆつくりと降ろす。しかし少女は顔を下に向きこちらをみようともしない。

「どうした？ 何かあつたのか？」

「いやなんでもない」

そう言うが顔は一向にこちらを向かない。もしや具合が悪くなつたのか？ 様子を見ようと顔を覗かせようとするが

「平気だと言つてるだろ!!」

うーむ、どうやら具合が悪いんじやなく機嫌が悪そうだ。なにかしてしまつたのか：もしや先程の抱えるのがまずかつたのか？ 緊急だつたのである様な抱え方にしてもお姉様抱っこお姉様抱っこ

まつたのだが、あまり良くなかったようだ。

「……ふう、よし。とりあえず中に入るぞついて来い」

深呼吸をして落ち着いた所で家の中に入れと言われついて行こうとするが、肝心なことを教えてもらいのを忘れていた。

「待つてくれ」

「なんだ? 今更躊躇うのか?」

「いやそうじやない」

「だつたらなんだのだ 「私は君の名前を教えてもらつてないのだが」」

そう、お互い名前も知らない状態なのだ。

これではいつまでも貴様とか君とかで話が進むのもおかしなもんだ。

「あ…そりいえばしていなかつたな」

「できれば教えて貰えると有り難いのだが?」

「ならまづは貴様から名乗れ、名前を聞こうとして自分から名乗らないのは礼儀としてなつてないんじやないのか？」

む、それを言われるとこちらは何も言い返せないな、スジは向こうが通つているわけだしここは自分が名乗らないとな。

「それは失礼。では改めて、私の名は衛宮。衛宮士郎だ」

「……」

「ん？どうした？こちらは名乗ったのだが」

「あ、いやなんでもない少し遠縁の知り合いに似ている名前があつてな」

「似ている名前？」

「あーいい、気にするなこっちの話だ」

似ている名前：もしや別世界での俺がいるつてことなのか？衛宮なんて苗字はそんなにはいなはづだ。

だとすれば気になる所だが：いやそれは後で聞くとしよう。

「私の名だつたな。聞いて驚くがいい、私の名はエヴァンジエリン。エヴァンジエリ
ン・A・K・マクダウエル。かの有名な闇の福音とは私のことだ!!」

「そ、そうかよろしくなミス・エヴァンジエリン」

「なんだその反応は! 聞いたことくらいあるだろ!!」

「いやすまないがまつたく」

おおかた年頃の子らしいカツコつけたいのだろう。

いやしかし二つ名か:元いた世界ならともかくこの世界での魔術師の確認ができる
ない以上安易に決定するのはよくないな。

「ふん!!まあいい。ではエミヤ貴様の事情はきつちりと中で答えてもらうからな。覚悟
しろ?」

「お手柔らかに頼むよ」

4時限目 今後の処遇

案内されるがままログハウスに入ると、外装の雰囲気とは真逆のぬいぐるみや西洋人形などが溢れかえつていて、ファンシーでロジックな内装が目の前に入ってきた。

(年相応なのはわかるが、これはありすぎだろう…しかも足の踏み場がほとんどない…)

だが少女、エヴァンジエリンは避けることもなく踏みながらリビングらしき場所に案内してからうじてスペースがあるソファへと腰をかける

「よし、まずはお前の素性、そしてその魔法も教えてもらおうかエミヤシロウ」

「…なんのことかね？」

「ふん、とぼけようとしても無駄だぞ？お前が私を抱えて走った時、お前から僅かな魔オードを感じ取れた。そもそも普通の人間が速さも瞬発力も出せるわけがないからな」

……ぬかつた。つい生前の癖で無意識に魔術を発動してしまったか：遠坂からしこたま言われていたことがすぐボロがでてしまった。

魔術師ないし魔術使いでも魔術の秘匿は必然でむやみやたらに使つたり、ましては一般人の前で使うなど言語道断なタブーなのに自分では気をつけているつもりだがどうも人助けが目の前にあると、つい忘れてしまうのが遠坂にもよく怒られていた。

「……」

「どうした？沈黙は肯定とみなすぞ？ちなみに私からまいて逃げようともしてもここからは逃げられない」

「……なぜ逃げられないと断言できる？」

「ここは麻帆良学園内のその中心に近い位置にある場所。ただでさえ外部からの侵入や破壊が困難な上、仮に入つたとしても強力な結界から逃げるのも至難の業つてわけさ」「……なるほど、つまりここは難攻不落の要塞且つ、脱出不可能な鳥の籠と言う訳か」

自分が言い終わると、シン…と沈黙が部屋に響き渡る。

ここで誤魔化そうと言い訳も言つてもただ時間と自分の不都合が長引くだけなのは明確だ。

「ふう…わかつた、降参だエヴァ。君の言う通り私はただの一般人ではない」

「ふん素直に最初から言えばいいものを。それでお前はどんな魔法使いなんだ？」

「？魔法使い…？いや私はそんな大層な者じやない、寧ろ魔術師のように目的の為ではなく、手段として使うから魔術使いが妥当だ」

「魔術師？魔術使い…なんだその名称は、魔法使いは魔法使いだろう。現にお前も魔法を使つていたではないか」

「いやあれは脚に脚力の強化魔術を付加させただけの…」

いや待て、この会話から聞いて取れるのはこちらの魔術と向こうの魔術…つまり魔法は同じ扱いつてことで良いみたいだな。ならここは混乱を避けることを優先して…

「…まあ概ねそのような解釈でいいだろう」

「？ではお前の魔法は後で詳しく聞くとしてだ、お前はどんな魔法使いだ？」

「…そうさな、強いて言うなら…」

”正義の味方”とこぼしそうになつたが寸の所で言葉を喉に引っ込んだ。

確かに正義の味方を目指してこの道を進んできた。だが、今の自分は新たな人生を貰つての再スタートだ。…果たしてこの夢は持ち込んでいいのだろうか。

「どうした？」

「…さて、どんな魔法使いなんだろうな」

「はあ？ なんだそれは、答えになつてないぞ」

「なら、君はどんな魔法使いなんだ？」

さつきから質問ばかりしてくる少女に逆にこちらから質問を返してやり返す。すると少女はニヤアと笑い自慢げに答えた。

「私が？ 私は”悪い魔法使い”さ」

「…」

「どうした？ だんまりして。それとも悪い魔法使いと言つたから悪が許せないたちか

？」

「…いや、別段悪だから倒そうなんて安直な考え方はしないさ、素直に悪といつても見方によつては善とも捉えられるからな」

「ほう、だが私は多くの人間をこの手で殺してしたぞ？それも懸賞金がかかるほどの」「だとしても、それは今ではなく過去の君の行いだ。現に君は私の目の前では罪を犯してはいないだろ？仮に君から告発されたとしても現時点では私が今の君を裁く道理がないのだ。それでも正義を執行するのであれば、それはただの正義の言う名の暴力だ」

そう、悪だから悪いとは安直な考え方だ。そもそも正義や悪は見方によつてはどちらとも捉えられる様に見えてしまう。たとえ本人の意志があろうとなかろうと。前の世界ではそのような人物を何人も見てきた。

”善人が悪行を成し、悪人が善行を成す”

暗に一括りで善悪を分けると言うことは至難の業だ。

ましてや仮に人を殺めるのが悪だというなら、私のこの手いや、この身は悪そのものだろうな。

「…ふうん、なるほどな」

すると少女は何を感じたのか先程とは態度が少し変わり自分の前に歩いてきて顔を覗き込む様に近づいてきた。

「…何か顔についてるかな?」

「少し、いやお前に断然興味が湧いてきた」

「なんだ藪から棒に」

「ククク、喜べ。このエヴァンジエリン様に気に入られたのは珍しいことだぞ?」

「そう言うと少女は離れていき机の上に置いてある受話器を取り何処かへ電話をかけた。

「私だジジイ。…ん?なんだ忙しから後にしろだと?そんなものは後にしろ……ああそ
の事ならすぐに解決出来るぞ。……そうだ……よし今から向かう、待つていろ」

力チヤン、と受話器を置いてスタスターと自分の方に戻つてくるやいなやソフナーに置
いてあつた黒いローブを身に纏い、まるで何処かへ出かける準備をする少女。

「おい、何をボサつとしている。お前もついてくるんだ」

「ついてくるとは、一体何処に行くつもりだ?」

少女の姿はまるで童話や伝承などで出てくる妖艶で魅入られるような恐怖を孕んだ雰囲気を漂わせていた。そう、まるで――

――吸血鬼のような。

「この麻帆良学園のトップにいる狸ジジイに会いにいくんだよ」

（麻帆良学園 職員室）

時刻は深夜2時過ぎを回ろうとしてた。

本来ならば就寝時間であり、静肅とした時間である。

だがここ麻帆良学園内の職員室では静肅とは無縁の状態となっていた。

「先程の爆発は結局なんだつたんだ!?」

「それがわからないんだ」

「わからないだつて!? そんなことがあるのか!?」

「現地に他の教師達を向かわせて確認をとつてもらつた。だがそこには原因とおもしきものも、ましてや魔法の痕跡もなかつた!!」

「だとしてもそれはおかしい!!なら何故結界がいとも簡単に壊されているんだ!?」
「そんなことこつちが知りたいわよ!!」

教師達は原因不明の事態に困惑していくパニックになつていた。

その中で1人腕を組み寡黙に考え事をしている30代ぐらいのスーツを着ている男
がいた。

名は高畠・T・タカミチという

(うーん魔法の痕跡がないのにこの学園の結界を破るほどのモノ。関西の呪術か、もしくは科学的な何かか。でも呪術は兎も角科学はそこまでに至つているとの情報はない
のだが……)

「高畠先生よろしいですか?」

「ん? 僕になにかな?」

「その、学園長から内線が」

そう言つて職員用の電話を受け取り電話にでる

今このタイミングで僕に話とは

「もしもし学園長、高畠です」

「おお、タカミチ君。こんな時間にもうしわけないのう」

「いえ、先ほどの事があつたのです。ところで僕に電話ということは」

「うむ、考えが早くて助かるわい。今すぐにでも校長室に来てもらえぬかのう」

「それは僕一人でという事ですか？」

「そうじや、他の者には穩便にしたいことなのじや。頼むぞ」

「わかりました。ではそちらにお伺いします」

ガチャヤリと受話器を戻して早急に職員室に出た。

この非常事態でわざわざ僕を名指しで呼ぶとは今回の原因が何かしらわかつたとい
う事だろう。

「さて、吉と出るか凶とするか…」

～麻帆良学園 校長室～

コンコン

深夜の静寂の中扉をノックする音が闇を響かせた。

「学園長、高畑です」

『おお、入つてくれたまえ』

ガチャリと扉を開けると奥には学園長と闇の福音エヴァンジエルそして、見知らぬ青年がこちらを見て立っていた。

「では早速話を…と言いたいところじゃがお互い自己紹介がまだじやつたから簡単にしてもらおうかのう。よいかな？タカミチ君」

「ええ、もちろん構いませんよ、それじゃ僕から。初めまして、僕の名は高畑・T・タカミチ。気軽にタカミチと呼んでくれて構わないよ」

「自分は衛宮士郎と言います。こちらこそよろしくお願ひします」

彼はそう言うと右手を差し出して握手をしてきた。

握手した手からは年相応の手からとは思えない力強さを感じ取れた。

(ふむ、見た感じはどこにでもいそうな好青年だが、僅かながら魔力の波長を感じる。まさか彼がこの騒ぎの原因とかじやないよな)

「うむ、自己紹介が済んだところで早速だが本題に入りたいと思う」

まじまじと青年の姿を観察していたら学園長から本題との言葉が聞こえた。つまりこの青年が此度の原因に関わっているという事なのだろう。

「すでにタカミチ君も知っているが今この麻帆良学園には外敵から守る為の強力な結界が張られておる。その結界が約1時間くらい前に破られたのじやが、今は再度結界が張られるようになつておるので最悪の事態は避けられた。しかし結界を破壊された原因がまだ解決しておらぬ、じやが——」

ことの経緯を説明する学園長、目線を青年からエヴァンジエリンの方に向ける。

「その結界を破壊した原因をエヴァ、君がみつけてくれたつてことですか？」

「そうだタカミチ。簡潔にいうとこの衛宮が結界を破壊した侵入者であつている」

彼女がそう言うと隣にいる彼は申し訳なさそうに縮み込んでいた。

——だが少しおかしな点がある。

「だけどエヴァ、仮に彼が結界を壊したとしよう。あの結界はほんのそつとじや壊れるような代物ではない。ましてや一時的な解除なら兎も角、破壊されるほどの力を彼が持つているとは正直いって考えにくい」

「どう、それこそ魔法世界の上位クラスの魔族や魔法使いじやないと説明がつかないし第一彼にはそれ相応の魔力を感じ取れない。ほぼ一般人と変わらないのだ。

「だがそれが可能なモノをこの男が持つているとしたら？」

エヴァがそう言うと青年に顎でクイッと合図を促した。するとその青年はコクリと頷くと右手を前に差し出してこう呟いた。

”^{トレイス・オン}
投影、開始”

すると青年の手には突然現れた白い片刃の短剣が現れた。突然出てきたのも驚きだがその短剣はどこが魔力を覆つた物を感じ取れる。

「それは？」

「詳しく述べませんが自分が魔術、いや魔法で作った武器と認識してもらつてください」

「つ?! なんだつて?!」

驚きを隠せなかつた。青年から短剣を貸してもらうと魔力は感じ取れるが重さや質感などは実物を持つていてる感覚があるのだ。

「学園長…これは…」

「タカミチ君が来る前に見させてもらつた。ワシも驚いたわい」

「自分はそれを作り出して消すこともできます」

そう彼が言うと僕が手に持っていた短剣はフツと泡の様に跡形もなく消えてしまつた。

これは凄いを通り越して不気味さを感じた。

彼がこの通り武器を作り出せるのなら結界を破壊する魔法道具マジックアイテムすらも容易に作れる事。いやもしかしたらそれ以上の——

「理解していただけましたでしょうか？」

「あつ、ああ……」

「付け加えますがこれ以上の散策はこちらの手札を見せることになりますから、これに
関する詳細や質問は受け付けないです。

これを見てわかる様に自分は手違いでこここの結界をわからなかつたとはいへ破壊して侵入してしまつたことには大変申し訳ないです。だけど決してここに危害を加えるためにやつた事ではないと断言します」

そう言うと青年は頭を下げて謝罪の一礼をした。

その謝罪からは不思議と邪なモノは感じ取れず寧ろ清々しさをも感じ取れた。

しかしだからといって青年の身の潔白が解決されたとは言い難い。

「タカミチ君、ワシはこの青年を信じて見ようと思うのじやが」

「学園長それは…」

「確かにまだ解らぬことは色々ある。じやが少なくともこの青年からは善き心があると思うのじやよ。それこそ立派な魔法使いの様な」
マギスティカル・マギー

「……わかりました彼を信じてみましょう」

しかし信じてみるのはいいとして彼をどの様に皆んなに説明するか…それにこれからどうするかが決まつてもいいない。

「さて衛宮士郎君、君が悪さをする人物ではないとワシとタカミチ君は判断しよう
…つありがとうございます」

「さて、今度は君の今後のことじやが…」

「ああ、そいつは私の家に住まわせる」

「」「!?」

なんだつて？今彼女は何を言つたんだ？
預かる？誰が？誰を？

「いや何、丁度私の身の回りの世話をする召使いが欲しくてな。どうも人形じや小回りなどが利かなくて困っていたのだ」

「いやそんな問題じやないエヴァ、君が預かることが問題だ」

そう、いくらこの学園の結界と高位クラスの呪縛の魔法で封印されて力が弱まつても魔法世界から賞金首で手配されている闇の福音ダーク・エヴァンジエルその本人だ。彼の身に何が起きておかしくない、いや寧ろその彼の魔法を使つて――

「ああ、貴様らが気になつてゐる事なら安心しろ。私の呪いはそう簡単に解ける程のヤワな魔法じやない。だから安心しろ」

「しかし「うむ、わかつた」学園長！」

「タカミチ君」こは一旦エヴァに任せて貰おうと思つてたのじや。理由は彼の素性が確定で尚且つこの混乱している時に他に預ける場所が正直難しいと判断したのじや、だがエヴァの住んでゐる所なら人目はつかぬし騒ぎが落ち着くまで良いと思つたのじや」

「…学園長…わかりました」

「すまんのうタカミチ君、それに衛宮君。君たちの都合を無視してこちらで決めてしまつて」

「いえ、元はと言えば自分が原因でご迷惑をかけてしまったので寧ろこちらこそ謝罪する立場ですから」

「話は済んだか？なら帰るぞ」

エヴァはそう言うと扉を開けてそそくさと帰つていった。彼もお辞儀をして校長室を後にした。

「さて、タカミチ君一悶着あつた所じやがもう一仕事頼んでもよいかな」

「はい、彼の身元と今後の処遇ですね？」

「うむ、話が早くて助かるわい」

衛宮士郎、まずは彼がどこからきたのか、どこの者なのかを調べないといけないな。

「しかし彼は何処となく不思議な人物ですね」

「タカミチ君もそう思うかい？」

「ええ、妙に落ち着いていましたし何より彼から感じた気配は年相応のものではなかつたですね、まるで何十年も戦いを潜り抜けた力量を感じ取れました」

この僕でも気を失いそうな強い気を感じ取れた。僕の勘だがすごい戦い慣れをしている。それも尋常じやない数をこなしているに違いない。本当に彼は何者なんだ？

「他の先生や魔法講師達にはワシから伝えておこう」

「わかりました。彼が悪い魔法使いじやない事を祈りましょう」

「うむ、そうであつてほしいものじや」

衛宮士郎君、君はどこから来て何の為にこの麻帆良学園に来たんだ？僕は君のことがすごく気になつてゐるよ。

（麻帆良学園・エヴァ邸）

ギイと扉が開く音と共にエヴァと自分はまたこの家に戻ってきた。

足の踏み場のない人形の上をずかずか歩いていき居間のソファーにエヴァがくつろぐと”お前も座れ”と言われた。

仕方なくあい向かいのソファーに座るとエヴァがニヤニヤ笑っていた。

「何がおかしいんだ？」

「いやなに案外あつけなくこちらで引き取られたのでな、本当ならもう少し愚図るかと思つていたんだがこうもうまくいくとは思つていなかつた」

クククと悪巧みを考えている悪者のように笑つてゐる。しかし俺から見るとイタズラが成功した子供の様にしか見えん。これがあちらの魔術師達が恐れられている賞金首だとは到底思えない。

「さて、士郎お前はこのエヴァンジエリンが預かることになつたその意味わかるか？」
「さあ、俺が逃げない様に監視じやないのか？」

「それはほんのオマケだ。あいつらの都合にすぎない本当の意味とはな」

「…」

ゴクリと生睡飲んだ。エヴァは吸血鬼だと言つていた。まさか眷属になれとか言う

んじやないだろうな？前の世界では黒髪の死徒のお姫様から配下にしてやろうと襲われたこともある。どうする……。

「私の配下、つまり召使いだ!!」

「はあ？」

「いやな丁度都合のいい召使い辺りが欲しいと思つていたんだよ。人形では細かい作業あいつらは苦手でな、ジジイに催促しようと思つっていたんだ」

「我ながらすごい気の抜けた声が出てしまつた。つまり勝手が効く召使いパシリが欲しかつたのか？そう思うと身体の力が抜けてきたわ。

「ああ、勿論お前の魔術の事も忘れてはいない。きつちり洗いざらいはいてもらうからな」

「げ、そこは忘れていて欲しかつたな。

まあこの世界には少なくとも魔術協会や埋葬機関などの過激な組織はいない世界みたいだから全く警戒しないとは言わないが大丈夫だろう。

そうだな投影は兎も角、魔術の基礎や強化辺りは教えても平氣だろう。

「はあ、わかりましたよつと」

「む、なんだ妙に改まって」

俺は立ち上がりエヴァの前に膝を屈み右手を差し出した。

「ここで召使いになるというなら一緒に住むつてことになるだろ？」

「まあな」

「だから改めて、よろしくお願ひしますつてことで」

エヴァは少し俺を見つめると顔を左に逸らして右手を出して俺と握手した。なんやかんやで俺のことを案じて引き取つてもらつたんだちゃんと礼を尽くさないとな。

「よろしくなエヴァ」

「…………ああ。こちらこそ…よろしくな」

こうして俺は新しい世界での生活が始まつた。

第1章 担任は子供先生と正義の味方 5時限目 子供先生来日

2003年2月上旬 早朝

朝の日差しが冬の空氣に暖かさを注ぐ今日この頃。

麻帆良学園内の駅近くの商店街からちよつと離れたエリアの境目辺りに、ぽつんと建つてある店がある。

店の名は”喫茶店アヴァロン”

「よいしょつと…ふう、今日の仕込みに必要な品物は仕入れたかな」

吐く息が真っ白に染まりながらも動いているのはこの店の店長、衛宮士郎。

喫茶店アヴァロンは定員数15～20人くらいが入れるカウンター席とテーブル席がある小さな喫茶店だ。

「さて、今日は朝から忙しい日だからな店の売り上げには欠かせないから念入りに準備した甲斐があつたな」

そう言う彼の目の前には店の入り口付近にガーデンテーブルを3台ほど並べていて、テーブルの上には大きなパンや大きなサンドイッチこれまた大きなおにぎり、お弁当が大量に並べられている。

値段はどれも全品300円と書かれた看板。プレートを目立つ所に置いてある。

「ようし、これで準備は完了だ。そろそろくるか n…」

丁巳年

突然駅の方角から地響きが勢いよく響きわたる。

謎の地響きの原因が徐々に徐々に明らかになつていき数秒後その正体が明らかに
よつた。

「パン／サンドイッチ／おにぎり／お弁当／くださいああああい!!!!!!」

「ぬおおおお!! いらつしゃいませええええ!!」

地響きの正体はなんと学生。それも1人2人じやなくかなり大人数で喫茶店アヴァロンに猛ダツシユで駆け寄つてくる。

対して士郎は待つてましたと言わんばかりに身構えてコインケースとお釣り用の小銭を準備している。

かくして早朝から仁義なき、衛宮証のお弁当購入合戦が始まった。

（早朝・麻帆良学園駅前）

「」「「ぬおおお!! いそげいそげ!!」「」」

プオーンと電車の到着音とともに一斉に降りてダツシユする生徒達。

駅前のロータリーではバスが何台も入れ違いに入つてきては生徒達が降りてこれまたダツシユで走つていく。なぜこんなにも慌ただしいのかと言うと――

ピーンポーンパーンポーン♪

『学園生徒のみなさんこちらは生活指導委員会です

今週は遅刻者ゼロ週間始業ベルまで10分を切りました急ぎましょう――

なお今週遅刻した人には当委員会よりイエローカードが進呈されます。くれぐれも余裕を持つた登校を……』

そう、この遅刻ゼロ運動シーズンのため学園内全ての学校生徒は遅刻をしない為、全☆力☆全☆身で始業チャイムがなる前に登校しているのだ。

無論遅刻した時のペナルティーが1週間居残り勉強^{エロード}とても嫌だからとかじやないぞ

(笑)

そんな登校中の生徒た達の中にある2人組の女子中学生が大急ぎで猛ダッシュして
いるのが見える。

とは言つても片方はローラースケートを履きながらそのスピードに樂々とついて
走っている2人組だか――

「やばいやばいーー!!」

「あーんアスナー待つてーなー！」

1人はピンク色のツインテールでリボンの代わりに鈴を結んである女子中学生。
もう1人は黒髪ロングの大和撫子を連想させる女子中学生。

名前は神楽坂明日菜と近衛木乃香。

「あー寝坊なんてしなければもつと余裕持つて出れて土郎さんの特性パンが買ったのにー!!」

「そりやアスナが夜遅くまで部活動してはつたからやろー?」

「そりやそうだけどさーしかも今日に限つて新任教師のお出迎えもしなきやいけないわけだし、朝からてんてこ舞いよー」

「それはスマッシュマン♪お詫びにシロウから昨日貰つた照り焼きサンドあるからこれで許してくな♪」

そう言うと鞄の中からラップで包んであるサンドイッチを明日菜にあげると明日菜は大喜びで受け取つた。そう衛宮士郎が作る料理はどれも美味しく且つ栄養満点なので体力バカの明日菜も大好きなのだ。↑

「照り焼きサンド!!うん、それならしようがない!」

(ちよろいわ～アスナ、うちちよつと心配や)

さつそく受け取った明日菜はラップを半分取つてあろうことか走りながら食べようとする。

「あ、アスナ走りながらは行儀悪いでー」

「今日は早く校長室に直で行かなきやいけないからー・さつさと食べてすまさないと！」

そう言い訳を言つていざ照り焼きサンドを口の中に…とその直前に横から思わぬ来客が割り込んできた。

「あのー…あなた失恋の相が出てますよ」

割り込んできたのは小学生高学年くらいの赤毛で後ろに髪を結んでいて背中には大掛かりなリュックを背負いながら走つている少年だつた。

「なつ…?!何だとこんガキャー!!」

ポロツ

「「あ」」

何と言うことでしよう突然の失恋宣告で反射的に答えてしまった時に手にしていた照り焼きサンドを濯うことか落としてしまい、そのまま地面にKISSしてしまった。

「あ”あ”——!!私の照り焼きサンドがあ——!!」

「ええ?!び、ごめんなさい!!」

「あー食べ物おつことすなんてもつたいないー」

「こんのがキンちよ!!びーしてくれるのよ!!」

「え、えーとその…失恋の相が顔に…でて いましたので…」

「なんていきなり初対面で失恋とか言われなきやなんないのよ!!それに私の照り焼きサンド!!」

ガシツ!!

「ど・う・し・て・くれるのよ〜〜〜」

「あわ、あわわ!!」

そう私念を唱えながら明日菜は少年の頭を掴むとクレーンゲームのように宙を浮かせて綺麗にアイアンクローラーをかましている。

少年は振り子人形のようにジタバタしてなすすべない状態だ。

「なあ坊や、こんな所に何しに来たん？」

「ここは麻帆良学園都市の中でも1番奥の方の女子校エリア、初等部は前の駅やよ」

そうここは学園内で中高等部のエリアで、その奥は女子校エリア、初等部は前の駅やよ。年少部と初等部は前の駅に降りる手筈となつてているのだ。

「つまり！ 子供^{ガキ}は入っちゃいけないの！」

「ほなウチら用事があるから1人で帰つてなー」

「じゃあねボク!!」

そう明日菜達が説明すると少年を下ろして帰りなジェスチャーをして帰れと促している。

一方少年の方は何や何やら参つているようで、あうあうとたじろんでいる。

そこに少年に助け舟をあげる1人の男性が校舎の窓から現れた。

「いや――いいんだよ明日菜君」

「えつ?」

「お久しぶりでーす!ネギ君!」

”ネギ”と呼ばれた少年に声をかけたのは30代後半の渋いダンディ（明日菜談）な教師、タカミチ・T・高畑だ。

「た高畑先 s 「久しぶりー!タカミチー!」えつ!し、知り合い!?」
「麻帆良学園へようこそ、いい所でしょ?”ネギ先生”」

その時、2人は硬直した。聞き間違いでなければ今高畑先生が言つたのが”ネギ先生”そう”先生”と言うとんでもないキーワードだ。

「え…せ、先生?」

「あ、ハイそうです」

木乃香がおそるおそる眩くとネギ少年は改めて身なりを整えて明日菜と木乃香にお辞儀をし、コホンと咳をしてこう挨拶をした。

「この度 この学校で英語の教師をやることになりました。」ネギ・スプリングフイー

ルドです」

「え、え、ええ——！？！」

一際でかい明日菜の叫び声が辺りを木霊するくらいにその衝撃な事実に驚きを隠せなかつたようだ。

（同時刻） 喫茶店アヴァアロン

「ふう……今日も何とか山場を迎えたようだな…」

場所は変わつて喫茶店アヴァアロン。

店主土郎は朝の購買ラッシュが一悶着ついたようでパイプ椅子に腰掛けて一息つい

ているようだ。

「おつといけね、確か今日は校長室に呼ばれてたんだったよな。すっかり忘れる所だった」

大事な用事を思い出していそいそと片付けをし始めようとすると、学園の方角からとてつもない叫びが聞こえてきた。

『キヤーーーッ!! 何よコレーーーッ!!』

それはまるで拡声器でバカデカく拡散された知り合いの声が駅前の喫茶店まで届いていたのだ。

「な、なんだ…? 今の声はアスナか?」

（麻帆良学園中等部・校長室）

先程の騒ぎから數十分後ネギと明日菜、木乃香は校舎内の校長室に案内され学園長、近衛近右衛門の前に立つていた。

「学園長先生!! 一体どーゆーことなんですか!?」

事の経緯を説明してほしいと学園長に迫る明日菜。

ちなみに服装はジャージを着ているなぜかと言うと先程ネギ少年の謎のくしやみで何故か着ていた制服が何故か破れ去つてしまい下着姿になってしまったのだ。

ちなみに今日履いていたパンツが毛糸の熊パンだつたのを高畠先生にモロに見られてしまいそれはそれはとても大きな叫び声を上げたとか。

「まあまあアスナちゃんや」

それを宥めているのは麻帆良学園の理事長兼学園長を務めている近衛近右衛門。見た目は頭部が細長く伸びており大妖怪ぬらりひょんと見間違えるようなフォルムをしている。ちなみに近衛木乃香は近右衛門の孫娘にあたる。

「しかし…なるほど、修行のためにはるばる遠い日本で学校の先生を……そりやまた大変な課題をもろうたのー」

「は、はい。よろしくお願ひします」

「しかし先ずは教育実習とゆーことになるかのう。とりあえず今日から3月までじや

「ちよ、ちよつと待ってくださいつてば!!」

話がトントンと進んでいると話を聞いていた明日菜が割り込んできて中断してしまった。

「なんじやアスナちゃん」

「いや話がスムーズにいつてますが、そもそも子供が先生なんてふつーおかしいじやないですか!!しかもウチの担任だなんて…」

「うーむじやがのコレは正式に決まつた手続きであるからのうワシもそれをわかつて
ウエールズと承諾したのじやよ」

それでも…と明日菜はなかなか納得していなそうで不満そうに顔を膨れさせていた。

そして近右衛門はコホンと咳き込むと改めてネギ少年を見て語り出した。

「さてネギ君。この修行は恐らく大変じやぞ？」

ダメだつたら故郷くにに帰らねばならん。

二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじやな？」

「は、はいつります。やらせてください！」

「…うむ、わかつた！その言葉を信じてみよう」

はつきりと自分の意思を伝えたネギ少年に近右衛門は2つ返事で承諾し、ネギ先生の教育実習生としてだが3月までの約2ヶ月間修行の許可が得られた。

「では今日から早速やつてもらうかのう……とは言いたいが流石にいきなり1人でやつてみせよとは言わん。

補助的な意味でネギ君には副教師を1人紹介しよう」

そう言うと後ろの扉からコンコンとノックする音がきこえてきた。

『学園長いらっしゃいますか?』

「おお、丁度いい所に来てくれたわい。入つてきて良いぞ」

近右衛門の許可が降りてガチャッと扉を開けるとそこにいたのは：

「え!? 士郎さん!?」 「あれー!?! シロウはんー!?!」

現れたのは先ほどの店の服からスーツ姿に着替えている衛宮士郎、しかも手には何故か電気ストーブを抱えていて、もう1人は指導教員の源しづな先生が中に入ってきた。

「あー！ シロウ久しぶりー!!」

「お、その声はネギ君か。久しぶりだなー1年ぶりかー?」

「え!? あんた士郎さんも知ってるの!?!」

何故か2人が知り合いだつたのがまたびっくりした様子で明日菜と木乃香は呆然としていた。

そして士郎は抱えていた電気ストーブを下に下ろしてふーっと息を吐いた。

「学園長この前預かった故障中の備品、直して置いときましたから」

「おー助かつたわい。いやー故障した物まで直してくれるとはありがいもんじや」

「んで学園長、今日はどーいった経緯で自分を呼んだんですか?」

「うむ、今その方を呼ぼうと思つていたところじや。オホン、紹介しようネギ君彼が君のサポート兼副教師をしてもらう学園広域指導員の衛宮士郎君じや」

「「……」」

「「ええーー!」」

またしても校長室で叫び声が響きわたつた。

「うそー!? 士郎さんが教師ー!?

「ほんまかー!? おじいちゃんー!?

「シ、シロウが僕の副教師ですか!?

「おいおい学園長。自分は教員免許は持つてないですよ!?

「あー皆落ち着け、落ち着くんじや。まだ話の途中じやよ。先ず士郎君の質問に答えると教員免許の方はワシの方で前もつて準備させて貰つておるから問題ない。「しかし

：「大丈夫じゃよ。士郎君にはあくまでネギ先生の補助として支えてほいのじや」

そう説明すると皆納得？したようで落ち着きを取り戻したようだ。

「その他の詳しい事は指導教員のしづな先生も手伝ってくれるから何かあつたら彼女に
きいてみるといいじやろう」

「はい、源しづなと言います。高畠先生から引き継ぎの書類などを預かっておりますの
で後ほど職員室で説明いたしますね」

そう言つてネギと士郎に説明するとウインクをするとネギは少し顔を赤くして照れ
てしまつたようだ。士郎の方はわかりましたと一言挨拶した。

「と言う訳だ。突然の成り行きだがネギ君の副教師としてサポートさせて貰うよ。よろ
しくな」

「はい！シロウがサポートしてくれるなら凄く助かるよ！こちらこそよろしくお願ひし
ます！」

お互い挨拶をすまし握手をしてよろしくと伝えると隣にいる明日菜と木乃香にも同じように挨拶をして握手した。明日菜は”まあ士郎さんなら……”と顔を逸らして照れていて、木乃香は”ウチはすごく嬉しいでーよろしゅうシロウー”とエヘヘと照れて笑っていた。

「あーそうじやもう一つ言い忘れていたことがあった」

「まだ何かあるんですか学園長」

「まだあるんー？おじいちやんー？」

「うむ、このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？」

？」

「え」

「げ」

”まだ住むところは決まつとらんのじやよー”と近右衛門はさらりと大事なことをカミングアウトしてその場の明日菜とネギをフリーズ状態にしてしまった。ちなみに木乃香は”ええよー”と肯定的な返事を返していく士郎は”おいおい”と呆れ顔になっていた。

「ちよ、ちよつと学園長!! それは流石に!!」

「すまんのうー（棒）」

「いや私達の部屋よりも男の士郎さんの所に住まわせた方が!!」
「いや士郎君の家はちよつと事情があつてな無理なのじや」

「そんな何から何まで学園長ーーーツ!!」

「えーアスナーこの子かわえーよ?」

「だからガキはキレイなんだつてば!」

あーだこーだ言つて騒いでいると近右衛門が”仲良くしなさい”の鶴の一声でその場は預かりとなりお開きとなつた。だが校長室からでても明日菜とネギはお互いに顔をそっぽ向き水と油のように相いれぬ状態へとなつていつた。

(やれやれ:初日から忙しくなりそうな予感がするな…)

そう言つて溜息をつき今後のことが心配そうに見ている衛宮士郎。

こうしてネギ先生と明日菜と木乃香、そして衛宮士郎の学園生活の物語は動き出し

た。

6時限目 子供先生と正義の味方

s i d e 衛宮士郎

「失礼します」

ガチャヤンと扉を閉めて校長室から出る5人。

しかし先程学園長から”仲良くしなさい”と釘を刺されて言われたのにネギと明日菜はお互いそっぽを向いて我関せずの態度をとつていた。

「あの…」

流石にこれではまずいと思ったのかネギは明日菜に声をかけようとした。しかし—

「言つておくけど!! あんたなんかと一緒に暮らすなんてお断りよ!!」

“そう断言すると”行こう木乃香と言つてスタスタと教室の方向に早歩きで向かつて行つてしまつた。木乃香も後をついて行くようにネギと私に”ほな先に行つてるなー”と言つてその場を後にした。

「何なんですかあの人は～？」

「ネギは最初から最後まで明日菜に嫌われてしまつたようだ。まあいきなり失恋と言われて尚且つ服か（何故か）消えてしまつたのだ。そんなんじや第一印象は最悪なのは仕方ない。

「それよりネギ君、そろそろ予鈴もなりそうだ。担当する教室に向かつてみたらどうかな？」

「え？あ、本当だ、急がないと！え～と…たしか…」

「ネギ先生と衛宮先生の担任クラスは2—Aですよ♪」

そう言つてクラスを教えてくれたのは源しづな先生だ。

しづな先生は早速2—Aに案内してくれてネギ君にクラス名簿を渡してくれた。

「うわー…これが僕が担当するクラス…」

「うんやはり女子校というだけあって教室には女子中学生達が30人ほどたむろしていた。」

しかもよく見ると見知っている人物も何人かいて…ん?なんとエヴァと茶々丸までもこのクラスだつたのか。

「この学園に居るとは聞いていたが…まさか担当するクラスの生徒だつたとは…」

「え、シロウ知つている人がいるの?」

「ん、あ…ああ…ちよつとな」

「なら少しホツとしたよ僕はさつきのお2人以外は初めてだからちよつと緊張しちやつて…」

そう言うとホツと息を吐いて胸を撫でるネギ。

まあ無理もない10歳も満たない少年がいきなり中学生の教師をやるだなんて前代

未聞だからな緊張しても仕方ない。

「大丈夫だネギ君。君ならきっと上手くやれるはずだ。それに」
「それに……？」

「君は立派な魔法使いになるのだろう？」

「つ……うんそうだよね！よーし頑張るぞー!!」

よしネギ君にいくらかヤル気が入ったようだ。

そう張り切つて教室のドアを開けるとドアの間に挟まっていた黒板消しがネギ君の頭上に落ちるやいなや、フワツと浮いてしまった。

”ざわつ……”

(こ、これは有名な黒板消しトラップ!?)

(な、ネギ君魔法障壁を解除してなかつたのか!?)

急いで頭上の魔法障壁を解除してそのままボフツと黒板消しをモロにくらつてしまいその場で咳を混むネギ君。

しかしトラップはこれで終わらなかつた…

ビシツ!!

よたついた足取りで足元にピンと引かれている紐に引っかかりそのまま上から水の入ったバケツが落ちてきてびしょ濡れ＆バケツを頭からかぶり視界が塞がつてしまいそのままロープで転倒した勢いで教卓まで転げ落ちてしまつて拳句の果てにはお尻に吸盤付きの矢が刺さつてしまい逆さまの状態で止まつた。

「ぎやふんっ!?」

「……あらあら」

「……（なんという極悪トラップ）」

「「「あはははははははは!!!」」

そして肝心のトラップを仕掛けたクラス達は引っかかったネギ君を見てどつと笑いに包まれていた。

：なんという鬼畜。

「ううう……」

「あはははは……つてあれ!? 子供!?!」

「ゴメン、てつきり新任の先生かと思つて……！」

ここにきてようやく罵にかけた相手が子供だとわかると生徒達はネギ君に駆け寄つて介抱し始めた。

だが君たち、子供じやなれば先生を罵に嵌めていい理由にはならないぞ…

「いいえその子があなた達の新しい先生よ。それともう一人先生がいます。さ、自己紹介してもらおうかしら」

パンパンと拍手をしてしづな先生に促され、各自の席へと着席する生徒たち。改めてネギ君が教卓の前に立つと生徒達はじつ…とネギ君に注目し始めた。

「ええと…あ…あの…ボク…ボク…今日からこの学校でまほ…英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。その…3学期の間ですけどよろしくお願ひします」

ネギ君…いやネギ先生の自己紹介が終わつたところで次は自分の番が来た。

「初めまして私はネギ先生の副担任、衛宮士郎です。主にネギ先生のサポートで私自身は授業を教えることはないが分からぬことがあれば遠慮せず相談してくれたまえ。同じく3学期の間だがよろしくお願ひする」

「「「……」」

自己紹介を終えたが、彼女達はシン…と不気味なほど静まり返っていた。

（なにか可笑なことをいったのだろうか…）

「「「か…」」

「か？」

「「「かわいい／かっこいい!!!」」

ワア～～と一斉にこちらに駆け寄ってきて方やネギ君に群がり方や自分のほうに押し寄せてきた。

「君何歳なの!?」

「えっ!? …か、数えて10歳です」

「どつからきたの!? 何人!?」

「ウ、ウエールズの山奥の…」

「どこに住んでるの?」

「えつと…その…」

と女子中学生の怒濤の質問攻めにあい思わずたじろんでしまったネギ君。とりあえず彼女達の流れから一足先に難を逃れた自分に一人の生徒が話しかけてきた。

「え、衛宮さん…だよな…」

「ん、ああ千雨ちゃんか」

「あの子供もなんですが…衛宮さんも…マジなんですか?」

「ああ、本当のことだよ」

声をかけてきたのは眼鏡をかけてポニーテールの長谷川千雨ちゃん。よくウチのお

店に来ている常連さんだ。

「え～なになに～？長谷川知り合い？」

「な、なんでもない」

「あれ、衛宮さんつて確か駅前の喫茶店の店長さんだよねー？」

「え、そうなの？私は広域指導員で不良達から死デス・ホーケの鷹エグつて異名が知られてるけど」

「うそーアタシは麻帆良のブラウニーツて面白い名前が噂されてるよー？」

などと今度は自分の話題になつて話が盛り上がりつついるようだ。：いやまた店長や広域指導員はともかく、麻帆良のブラウニーとは一体なんだ？

と考えているとズガズガとネギ君に近づいてきてそのまま胸倉を掴むと一気に顔を近づかせ――

「アンタ、さつきの黒板消しに何かしたでしよう？なんかおかしくないアンタ」

ギクつと体をビクつかせアワアワと顔を青ざめてしまふネギ君。対する明日菜は疑いぶりながら説明しなさいよと搔きぶりをかける。

(いかんな、ネギ君がパニクっている。ここは助けないと…)

と明日菜を止めようと声をかけようとすると――

「いい加減になさい!」

と机をバンバンと叩いて叫んだのは金髪のロングヘアでいかにもお嬢様らしい品格を揃えている生徒だ。

たしか出席番号29番、クラス委員長の幸広あやか君だったかな。

「皆さん席に戻つて。先生方がお困りになつてるでしょう?そしてアスナさん貴女もその手を離したらどう?もつとも貴女みたいな凶暴なおサルさんには、そのポーズがお似合いでしようけど」

カチンツ 「何ですつて?」

あやかに馬鹿にされた言い方をされてギロリと睨みかえす。するとネギ君を離しズ

ガズガとあやかのそばによつていき…

「委員長、なにアンタいい子ぶつてんのよ」

「あら、いい子なのだからいい子に見えるのは当然でしょ？」

「なーにがいい子よ、このショタコン」

「んな!?」

と明日菜にショタコンを暴露されタジろぐあやか。

「言いがかりはお止めなさい!! 貴女だつてオジコンのくせに!!」

「な、なんですつて!?」

「知つてるのよ! 貴女が高畠先生の事が…」

「ウギヤー!? その先を言うんじやねーこの女ー!!」

と互いの性癖を暴露され取つ組み合いの大乱闘とかしてしまった。他の生徒は喧嘩を止めるどころか”ヤレヤレ!!”などの煽りを飛ばす始末、ネギ君は初めてだろうから才口オロと参つている。

(やれやれ…俺が止めなければならぬのか…)

「これら2人ともやめるんだ!! いつまで喧嘩しているつもりだ?」

「えつ…!? あ、はい…」

「もう授業のベルはとっくに過ぎているんだ。このままネギ先生の授業を台無しにするつもりかい?」

「あ…その…ごめんなさい」

「すみません衛宮先生…ついあつくなってしまって…」

「わかればいいんだ。さてネギ先生授業の方を始めて貰えるかな?」

「え…あ、はい!! えーとそしたら皆さん席についてください! そ、それから英語の教科書の12…8ページ…の…」

自分の鶴の一聲で喧嘩を納めてとりあえず授業を開始した。自分は教室の1番後ろに下がつて授業を見守ろうとしたのだが…ネギ君はまだ背が小さいのだろう、黒板に届かなかつたのだ。そんなネギ君をみて生徒達はカワイイと言いながら笑つていた。

するとあやかがネギ君に豪華な装飾が入つてゐる踏み台を貸してくれて、漸く黒板に手が届いたようだ。すると後ろから

「アイタツ!?」

とネギ君が叫んだ。ネギ君は後ろを振り返つて確認するが分からず授業を再開しようとするがまたしても後頭部に物が当たりまた後ろを確認した。

ネギ君に当たっている物の正体は明日菜が消しゴムをちぎつて弾き飛ばしていたのだ。

全く授業開始そうそう何をやつているんだか…

「神楽坂。授業中に消しゴムを先生に飛ばすのは授業で習う姿勢か?」

「へっ!?あ、その〜」

自分が注意すると明日菜はドキッとビクついて誤魔化そうとするがクラス中が笑つてしまつて目立つてしまい顔をうつ伏せに隠してしまつた。そのあと自分を睨んでいたが”授業を聞かない明日菜が悪い”と目で訴え黒板を見るとジエスチャーハンマーがあやかが声を上げて

「全くアスナさんは授業を聞かないでことわざもあろうことか消しゴムを飛ばして邪魔をしようだなんて！ネギ先生、あの女には近づかない方がいいですわよ。なにしろあの女はバカで、粗暴で、乱暴者の問題児でオマケにスケベでインラ…」

バコンッ!!とあやかの後頭部になんと筆箱を投げ飛ばした。それを切り口にあやかも明日菜の方に飛びつきまたしてもリアルファイトが始まってしまいそのまま授業終了のチャイムがなつてしまつた。

(はは…こりや前途多難だな…ネギ君)

こうしてネギ先生最初の授業は悲惨な状態で幕を閉じたのだった。

（放課後）

先程の授業の一件から時間が経ちようやく放課後となり自分はネギ君とは一旦別れて職員室に戻ろうとしていた。

「あの、士郎さん」

後ろから自分を呼んだ方向に振り返るとそこにいたのは髪を左に縛つてサイドテールが似合うクラスの生徒桜咲刹那だ。

「おうどうした刹那。俺になんかようか?」

「あ、はい今日の夜の予定なのですが?」

「あー今日だつたなそれがどうかしたか?」

「いえ、この後広域指導員もあつてお店の事もありますので身体のほうは大丈夫かと…」

「ああそんなことか、心配してくれてありがとな俺は平気だよ。ただ…」

「ただ…? どうかなさいましたか?」

心配そうに自分の様子を伺っている刹那。
うん、そこいら編は大丈夫なのだが…：

「ウチの主人兼お姫様がな…機嫌そこねそうで…」「あ、ああ…エヴァンジエルンさんですか」

「そ、うなんだよ…まさか今日から先生になるとは思つていなかつたから夕食の準備がで
きそ、うになんじやなあ…」

そう、自分の家の主人ことエヴァの『ご飯を作るのが遅くなる…いや下手すると作れそ
うにないのでまた茶々丸に頼んで貰つて作る羽目になるのだがこれが1回2回じやな
く、今日を入れると連続6日になつてしまい流石にエヴァがキレてもおかしくないの
だ。

「先生になるのは私もびつくりいたしました。学園長先生も事前に言つてもらえばよ
かつたのでは…?」

「全くだ。つたくあの人の悪戯好きでサプライズ好きな性格には困つたもんだ」

「でも…その…土郎さんの…スース姿…とても似合つていました…よ…」モジモジ

「お、そ、うか? そ、れはありがとうな刹那」
「ひやつ…//／＼

そう言つて刹那の頭を撫でると刹那はリンゴのように顔を真つ赤にして下を向いて
しまつた。

刹那は普段は凜として大人顔負けの強さを持つているがこうして見ると中々可愛げ

などころがあるもんだ。

(こう言う所は普通の年頃の女の子と変わらないのだから、木乃香とも仲良く接してくれるといいんだけどな)

「そ、そ、その…!! 私!! 準備があります…ので!! // /」

そう言うと刹那はお辞儀を何回もしてその場を猛スピードで離れていつてしまつた。

「おう刹那、 気をつけて帰るんだぞー」

さて、これから職員室の自分の席にある書類を片付けて今後のスケジュールをネギ君と話し合わないといけないな。それに店の後片付けと夜の営業をやつて広域指導員の仕事もやらないといけない。本当にやる事が多いな。

そういうばネギ君はどこに行つてしまつたのだろうか? そう考えていると…

「うわ〜ん!! シロウ〜!! どうしよう〜!!」

突然半ベソかきながら自分の元に駆け寄ってきた子供先生ことネギ先生。一体何があつたんだ?

「どうしたネギ先生、何かあつたのか?」

「ア、アスナさんに…魔法がバレちゃいました…」

「なんだつて!?!」

初日から魔法がバレた、しかもよりによつてウチの生徒の神楽坂明日菜に…なんでさ。